

福岡工業大学 学術機関リポジトリ

教養教育における主体性育成のための教育実践

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福岡工業大学教育開発推進機構 公開日: 2023-09-06 キーワード (Ja): キーワード (En): Autonomous learning, Faculty development, Liberal Arts 作成者: 土屋 麻衣子, 原田 寛子, 檜崎 兼司, 中野 美香 メールアドレス: 所属: 教養力育成センター, 教養力育成センター, 教養力育成センター, 教養力育成センター
URL	https://fit.repo.nii.ac.jp/records/2000019

教養教育における主体性育成のための教育実践

土 屋 麻衣子 (教養力育成センター)

原 田 寛 子 (教養力育成センター)

檜 崎 兼 司 (教養力育成センター)

中 野 美 香 (教養力育成センター)

Teaching Practices for Nurturing Learners' Autonomous Learning Attitudes

Maiko Tsuchiya (Center for Liberal Arts)

Hiroko Harada (Center for Liberal Arts)

Kenji Narazaki (Center for Liberal Arts)

Mika Nakano (Center for Liberal Arts)

Abstract

Under the university-wide Faculty Development policies for 2022, our university's Center for Liberal Arts conducted original workshops three times during the 2022-23 academic year. Three teachers gave presentations about what they did in the classroom to nurture learners' autonomous learning attitudes. The topics covered how to raise learners' motivation, practical ways to set up assignments, and how to increase students' ownership in learning. In each workshop, participants exchanged opinions on what teachers can or should do to facilitate learners' autonomy, and this provided the participants with new insights toward teaching.

Key words: *Autonomous learning, Faculty development, Liberal Arts*

1. 2022年度FD推進機構教養力育成センター部会の重点事項

教養力育成センターは、2016年度からの第7次マスタープランの実施時より、DPのG(主体性)、H(実行性)、I(協働性)の育成に寄与すべくアクティブ・ラーニング型授業を初年次教育で積極的に導入し、大学という新しい学び場に対する学習者のマインドチェンジに注力してきた。ACC(大学教育再生加速プログラム)事業を通し、全学的にアクティブ・ラーニングの成果が見られたところではあるが、今後は2040年に向けた高等教育のグランドデザイン答申の基本とする考え方である「学習者本位の教育」という視点を踏まえ、さらに学習者の主体性の醸成に当たる必要がある。

このような社会的要請を鑑みて、教養力育成センター部会は、昨年度に引き続き重点事項の1つとして「学生の主体性・自律的学習促進に資する研修会の実施」を掲げた。教養教育を通じて、いかにして学生の主体性を促すかという点を共通の問題意識として持つために、そして新時代を生きる学生に対応する指導方法のアップデートが必然であるという観点に立つ設定であった。

2. 研修会の概要

今年度は第1回(10/19)を原田、第2回(12/14)を檜崎、第3回(2/8)を中野の3名が担当し話題提供を行った。FD推進室にも参加をもらった。研修会では、まず発表者が主体性の育成に繋がる

授業内の取組についてプレゼンテーションを行い、その後、意見交換の時間を設けた。以下、各回の担当者による実践内容である。

3. 主体的な学びを個人で深めるための取り組み (原田寛子)

本章では、「異文化理解」の授業を通じて実践した個人の主体性に働きかける取り組みを紹介する。アクティブ・ラーニング形式の授業は、近年、身近な授業スタイルとなってきたが、他者と協働して得られた学びを個人の知識に落とし込むには、主体性を持って一人で思考を深める機会が必要である。「異文化理解」の授業では、授業後に毎回、各自の考えを FIT-AIM に入力する課題を課し、グループワークでの議論を個人の意見にまとめる機会を設けてきた。

3.1 取り組みのきっかけと課題内容

この課題を課したきっかけは、2020 年度にオンデマンド型遠隔授業を行った際、学生の授業に対する理解度と反応を確認するためであった。学生の入力内容には充実したものが多く、効果的であると判断し、対面授業に戻った後も 2 年間継続して行っている。毎回の授業の最後に教員が当日の授業内容に関連した課題を伝え、期限内に学生が FIT-AIM にその課題に関する個人の意見をまとめる。担当教員が学生の入力内容を確認し、次の授業の冒頭でその一部を紹介しながらコメントを付し、前週の復習を行うという流れで、10 週ほど繰り返して行った。課題入力成績評価の 10 パーセントに加えた。

入力課題はテキストのワーク課題からそのまま使用することも、また、担当教員が独自にお題を課すこともあった。例えば 3 回目の授業では、テキストから「自分が常識だと思っていたことが通じなかった経験」についての意見を求め、教員からは「引き継ぎたい文化、引き継ぎたくない文化」についての意見を入力するよう課題を出した。学生の入力内容には、食べ物に関わる常識の違いや、

地方によって異なる時間感覚、墓参りの習慣の違いなど個人の経験に根ざした意見が多く書かれた。また、引き継ぎたい文化として日本建築の話題を取り上げ、国際的な視点も踏まえて意見をまとめた学生もいた。授業でのグループディスカッション後の発表では出なかった、具体的で独自の調査を踏まえた入力内容も多数見られた。授業日から入力期日までに週末をはさむことによって、十分に考えをまとめる時間を設けたことも効果的であった。

3.2 教員のねらいと工夫

この課題を出す背景には、自主的に個人での思考を深めることを習慣化させたいというねらいがあった。毎回授業の冒頭で、他の学生が書いた意見を知ることで、自らの意見を振り返る機会を提供できる。また、自分の意見が皆の前で紹介できれば更なるやる気につながる。それによって、自分の意見をまとめることを前提として授業を聞くようになり、グループワークにも積極的に参加し、良い循環が生まれるのではないかと考えた。

このようなねらいの効果を高めるために、教員側ではいくつかの工夫を行った。まず、意見紹介の前には、「今回も皆さん、とても興味深い意見を書いてくれました」など前向きなコメントで始めることを心掛けた。学生の入力内容を紹介する際には、パワーポイントに文字で示し、それを丁寧に読み上げながら紹介した。その際に、紹介した意見の興味深い点や前回の授業との関わりなど、様々な視点から前向きな評価コメントを加えた。また、FIT-AIM の入力確認を行い、紹介する内容を選ぶ際には、すでに紹介された学生が重複して選ばれることがないように、一人ひとりチェックをし、なるべく全員の意見が紹介できるように管理した。

3.3 学生の反応と変化

初回の課題入力で、しっかりと意見を述べている学生もいたが、入力を忘れていた学生も多く見

られた。授業の冒頭で入力内容を紹介すると、2～3週目には変化が窺えた。まず、授業で紹介された内容をひとつのモデルとみなし、それに近づけるよう全体的に入力する文字数が増え、それとともに内容にも充実度や具体性が増した。また、自主的にインターネットなどで調べて意見を述べる学生のコメントが紹介されると、次週には同様に調査を行って意見を展開する者も見られた。このように、他人の意見を参考にすることによって自分の意見を自主的に改善しようとする動きが数週間の間に窺うことができた。4～5週目ぐらいまでには、課題入力に意識が向いていなかった学生も入力をするようになり、課題と関係のない内容を入力する学生への指導も行い調整を進めた。5週目以降には、授業を受け、個人で意見をまとめ入力し、次回の授業でコメントを共有するというサイクルが出来上がった。

3.4 まとめ

毎週の課題入力は、期日もあるため学生には負担になっていることも考えられた。アンケートでは「課題入力の回数をもう少し減らしてもいい」という意見があり、また、個人で自主的に思考を深めるよりも、グループワークでの意見交換の方が学生には印象深く残っているようであった。FIT-AIMの入力課題に関するコメントは少数であるが、「FIT-AIMに記入して行く度に、自身の考えを整理することができていたと思います」「グループで話し合うことで実際に異文化を感じることができ、講義後のFIT-AIMの入力で各章の重要な部分を振り返ることができました」という意見が得られた。教員側のねらいは必ずしも学生に効果的に響くわけではなく、改善の余地も窺える。教師側のねらいと学生のやる気のバランスは常に見極める必要があるが、何よりも、学生のやる気を盛り上げる仕掛けと工夫が重要であるだろう。

協働学習の楽しさから生まれる効果は教員も学生も実感していることだが、時に楽しいだけ、ただ参加するだけで終わることも少なくない。いか

なる学びにも個人として主体性を持って参加し、「もっと考えてみよう」と自主的に思わせる仕掛けが必要である。個人の学びの主体性が強化されることで、アクティブ・ラーニングもより活発になる。協働と個人、両方向からの自主的な関わりが真の成長と学びの深化につながると思われる。

4. 地域創生入門における実践事例の紹介（檜崎兼司）

檜崎が2020年度から2022年度まで主担当として従事した教養力育成科目の学部横断型の選択科目である「地域創生入門」においては、2020年8月に本学と包括的連携協定を締結した福岡県糟屋郡篠栗町の多大な協力のもと^{1),2)}、同町の高齢者福祉ならびに介護予防をテーマとした課題解決型授業（PBL: problem-based learning）の展開を試みた（図1）。この科目では、プロジェクト学習を基盤とする授業設計を行なってきたが³⁾、この授業設計に加えて受講生の主体性・自律的な学修を促すための複合的な工夫を心がけた。本稿では、2022年度の地域創生入門における実践事例の紹介として、これら工夫のいくつかについて概説していきたい。

4.1 履修に際しての事前課題の実施

本科目の初回授業を遠隔形式で実施し、その中でMicrosoft Formsによる事前課題を履修希望者に課した（図1）。この事前課題では、本科目の履修にあたっての受講条件（例：通常授業への出席に加えてプロジェクト学習のための授業時間外のグループワークの実施や篠栗町でのフィールドワークへの参加が求められること、遠隔授業やグループワークにおいてMicrosoft Teams等のICTツールの利活用が随時求められること）を充足できるかどうかを自己評価させ、履修時のいわゆるミスマッチの防止を試みた。また、本科目の受講を希望する理由や、本科目におけるキーコンセプト（例：地域創生、介護予防）に関する自身の現段階での考え、さらには本科目で実施したい企画提

回	日付	内容
1	9/29	履修に際しての事前課題（遠隔授業）
2	10/6	オリエンテーション、アイスブレイク
3	10/13	講義①「福工大・檜崎が取り組む地域創生」（講師：檜崎兼司）
4	10/20	講義②「イノベーションを通して地域創生をデザインする」（講師：西日本新聞社 メディアプランニング部 鳥越博文様）
5	10/27	フィールドワーク「篠栗町における介護予防教室および元気もん調査測定会の視察」※10/27の代替授業として11/1および11/2に分散実施
6	11/10	講義③「DX時代のICTを活用した介護予防への取り組み」（講師：株式会社NTTドコモ イノベーション統括部 仲野嘉浩様）
7	11/17	「プロジェクト学習の基本と手法」理解度確認テスト
8	11/24	プロジェクト学習①「準備、ビジョン・ゴール」
9	12/1	プロジェクト学習②「計画、情報・解決策その1」
10	12/8	プロジェクト学習③「情報・解決策その2」
11	12/15	プロジェクト学習④「中間報告、制作その1」
12	12/22	プロジェクト学習⑤「制作その2」
13	1/12	プロジェクト学習⑥「予行練習」
14	1/19	プロジェクト学習⑦「篠栗町長へのプレゼンテーション」
15	1/26	プロジェクト学習⑧「再構築、成長確認」成長報告書の作成

図 1 令和 4 年度「地域創生入門」の授業概要

案に関する現段階でのアイデアなどを検討・表明させ、学生自身による主体的姿勢のセットアップを促した。

4.2 本科目における学びの意味付け

各受講生が PBL を通した学びの意義をより明確に理解した状態で、授業後半のプロジェクト学習に主体的に取り組めるよう、主に授業前半にいくつかの意図的な工夫を行なった。具体的には、授業前半の外部講師による講義に際して（図 1）、事前に「ご担当される講義の最後に、第一線で活躍されている社会の先輩から受講生（大学生）へのエールやアドバイスとして、『本科目および大学生生活全般でどのような学びや経験を得ると良いか／どのような学びや経験を期待するか』という点に関して、お言葉をいただければと考えております。」といった依頼を行い、受講生による学びの意味付けにつながるきっかけ作りを試みた。また同様の意図で、過去に本科目を受講したクラスサポーター 3 名に「本科目におけるプロジェクト学習の意義」について、授業の中で各 5-10 分程度のスピーチを行ってもらった。

4.3 最終授業における成長報告書の作成

受講生自身が本科目のプロジェクト学習を通じた「自分にとっての学び」を明示的に整理・認識する機会を設定し、次のチャレンジへの起点を作ってもらおうことを意図して、本科目の最終授業において「成長報告書」の作成を課した（表 1）。具体的にこの成長報告書では、本科目の受講による「あなたの成長ベスト 3」の検討や、初回授業と最終授業の間での自身のコンピテンシーの変化とその理由の検討、受講の中での様々な経験を通して獲得した実践的な学びやそれら学びの今後の有用性に関する検討などを受講生に課した。コンピテンシーの変化に関しては、Microsoft Forms の NPS（Net Promoter Score）機能を用いて 0 点（変化が無かった）から 10 点（変化があった）の 11 段階で自己評価をさせたところ、全回答者（23 名）の平均は 7.8 点（標準偏差：1.5 点、範囲：5-10 点）となった。また、成長報告書の中で本科目を受講した感想を聞いたところ、学部横断型授業のメリットをあげるコメントや、主体性育成に対するメリットを示唆するコメントなど、前向きなコメントが多く得られた（表 1）。

いろいろな学科や学年の人たちとかわることが出来て面白と感じた。
この授業を通して、沢山の新しい友達と出会うことができました。沢山の仲間や初めて話す人との交流はとても難しいですが、できるようになったのはこの授業のおかげだと思います。ニックネームで生徒を呼んでいるので、とても親しみやすく頑張ろうという気持ちが起きました。
この授業で新たな仲間と出会い、協力して作り上げていくことによって、自分を成長させ、達成感を絶大に感じることが出来ました。
半期というあつという間の期間の中で苦戦しながらグループのみんなで知恵を出し合いながら最後に達成感を味わえる授業だった。
他の科目では得ることのできない力を獲得することができたと感じました。専門科目などでは知識を蓄えることができましたが、この科目ではチームで協力することの大切さや課題を発見する力などを身に付けることができました。
自分のできること、できないことを再確認したうえで、できないことや苦手なことに挑戦することができたと感じます。先生が授業プランと考えていた挑戦することによる成長をすることができたと感じます。
今後この授業で学んだ知識や能力を活かして更なる飛躍を果たしたいと思っています。そして、様々な考え方もった人たちと関わることでとてもいい経験ができ、楽しかったです。
自分はたくさん話し合いをもとに多くの人との交流の場を得たいと思い、この講義の受講を希望した。最初にこの目標を設定してこの講義に参加したが、オリエンテーションやフィールドワーク、プロジェクト学習を通して自分や他の人の意見を共有し合う機会を得られたため、目標を達成することができたと感じている。

表 1 「地域創生入門」を受講した感想（成長報告書からの抜粋）

5. 「2022 新聞コミュニケーション大賞コンテスト」の実践報告（中野美香）

5.1 背景と目的

VUCA 時代において教育現場でアントレプレナーシップ（起業家的精神）の育成が求められている。アントレプレナーシップ教育とは、「起業家的な思考や行動ができる能力を育む教育を指す。つまり、狭義の意味での「起業家」を育成する教育のみならず、「起業家的」な思考や行動によって、自分のキャリアや人生をより豊かで幸せなものとし、同時に、自分を取り巻く人々や私たちの社会をより良いものへ発展させていくことができる人材を育成する教育を指す。⁴⁾ 本学は国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）による「大学・エコシステム推進型スタートアップ・エコシステム形成支援」の採択を受け、全 16 機関（2023 年度から 19 機関）から成るオール九州・沖縄圏一体でアジアとつながるスタートアップ・エコシステム（Platform for All Regions of Kyushu & Okinawa for Startup-ecosystem: 以下 PARKS）に参加している。2022 年度はキャリア関連科目でアントレプレナーシップ教育を一部導入した。前期「キャリア形成」では外部講師を招聘し、「自分らしさ」につい

て分析し、自己理解と社会理解を関連付けた。後期「コミュニケーション基礎」では、2014 年度から西日本新聞社と実施している「新聞コミュニケーション大賞コンテスト」^{5),6)}を新たにアントレプレナーシップ教育に位置付け、実施した。本論では 2022 年度後期に実施したコンテストの事例を報告し、今後の展望を述べることを目的とする。

5.2 コンテストの概要

2022 年度後期「コミュニケーション基礎」では、前期講義で行った「自分らしさ」の探求を実践的活動に結びつけることをねらいとした。第 6・7 回で西日本新聞社による出前講義で時事問題について理解を深めた後、3 週間後にコンテストの課題を講義で提出してもらった。課題は図 2 に示した 4 つのステップから構成される。この課題はアントレプレナーシップ教育として「自分の興味関心」を「社会への提案・提言」に関連付けられるように課題の指示文を一部変更し、講義で重要性や必要性を説明した。

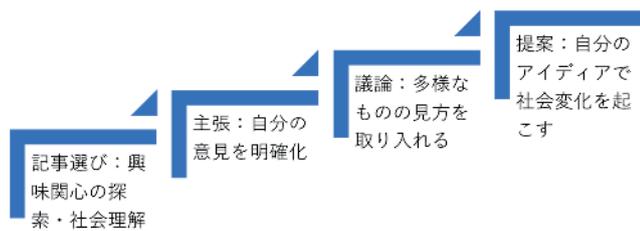


図 2 コンテスト課題の構成

5.3 結果と考察

受講者数 1130 人に対して応募総数は 1020 点、参加率は 90.3%で、初めて参加率が 9 割を超えた 2021 年度に続いて 2 年連続で 9 割を越えた。課題の内容に関しては、2021 年度までは提案・提言が曖昧で、「社会が変わるべき」「誰かがやるべき」等の記述が散見された。これに対して、2022 年度の提出課題は提案・提言が具体的かつ明確で、「自分ができることをできることから実行する」「大学で学んだことを活かして社会に貢献する」という主体的な姿勢が増えたことが西日本新聞社からも評価された。1 年間かけて意識醸成から発展的活動まで段階的に学習を進め、提案・提言したいこと（ゴール）を念頭に記事を選んだことで、意欲的な作品が増えたのではないかと考えられる。その一方で、これまで課題の意義や前提となる社会背景の理解が不足していたのではないかという反省が得られた。主体性は「どう伸ばすか？」という議論になりがちであるが、必要十分な情報を教員側が提供しているか、課題の意義を理解した上で学生は取り組んでいるか等、主体性を「抑制する要因は何か？」という問いを持つことの重要性が示唆される。

5.4 まとめと今後の展望

本論では、社会的要請の高まるアントレプレナーシップ教育に関する本学の取組として、「2022 新聞コミュニケーション大賞コンテスト」を紹介した。この知見を踏まえて、2023 年度も学習機会を増やす方向で進めている。PARKS の活動もアメリカの大学のプログラムの研修⁷⁾や小中高連携事

業や等、発展しており、最新の教育手法を学び他大学と情報交換・研究開発を進めながら、VUCA 時代を生き抜くために質の高い教育プログラムを学生に提供していきたい。

6. おわりに

DX の進展など時代の急速な変化につれて、初年次教育での主体性醸成のための教育の必要性が益々高まっている。また、社会人になってから受けるリカレント教育も注目されるようになり、自分で適切な目標を設定し、計画を立て、振り返りながらチャレンジを続けるという主体的姿勢は、個々のウェルビーイング獲得のために生涯にわたり重要な要素だと考えることができる。

主体性の程度や向上の度合いは目に見えないため、また個々の学生の興味や動機付けとも関連するため、万人に効果的な育成方法を見出すのは難しいが、大学ができることの 1 つとして、主体的に関わることができる機会を様々な場面に「仕掛けておく」があるだろう。その際、「言われたから、指示されたから行う」という意識が学生に生じないよう、決してあからさまでないように設定することも大事である。今年度に話題提供をしてくれた 3 人の先生の取り組みは、まさにそのような教育的仕掛けが、周到にそして十分に織り込まれているものであり、従って、手応えを感じる教育効果を生むものであったと考える。

本取り組みは、センター自立化を契機に開始し、今年度で 2 年目であった。教員同士で意見を交わし、知見を共有し合うということで、同じ教育目標に向かっているという意識合わせすることができた。多様な学生、多様なニーズに対応すべくアップデートを図るという教員の主体的取り組み姿勢は、確実に学生に伝わることだと考え、来年度以降も継続していきたいと思う。

参考文献

- 1) 特集地域連携－篠栗町と包括的連携協定を締結－，社会連携室広報誌 Co-Creation, 5, PP2-3, 福岡工業大学社会連携室（2021）
- 2) 「地域創生入門」で学生が篠栗町長にプレゼンテーションを実施，社会連携室広報誌 Co-Creation, 7, P7, 福岡工業大学社会連携室（2023）
- 3) 鈴木敏恵：プロジェクト学習の基本と手法－課題解決力と論理的思考力が身につく－，教育出版（2012）
- 4) Platform for All Regions of Kyushu & Okinawa for Startup-ecosystem：PARKS（2023）アントレプレナーシップ人材育成プログラムの運営・開発，
<https://www.parks-startup.jp/>（2023年5月2日閲覧）
- 5) PARKS（2023）世界最高水準バブソン大学のアントレプレナーシップ教育手法を学ぶ教育プログラム開催，
<https://www.parks-startup.jp/entrepreneurship/>（2023年5月2日閲覧）
- 6) 中野美香・河内山翔平（2017）大学初年次教育における新聞を用いた文章作成の指導法の提案：「新聞コミュニケーション大賞」受賞意見文の分析を通して，日本 NIE 学会誌，12，29-36.
- 7) 中野美香・下園大貴（2019）大学生の情報収集行動に影響する要因の探索：新聞コミュニケーション・コンクール受賞者との比較を通して，日本 NIE 学会誌，13，41-50.